巻頭作家紹介

彗星集
5月号巻頭
松崎逍遊

（まつざき　しょうゆう）昭和二十四年長野県伊那市生まれ。平成十九年より伊藤伊那男に師事。平成二十二年「銀漢」入会。平成二十四年「銀漢」同人。

遠野火を昼の峠に見て越ゆる　　松崎逍遊

峠の名は「杖突峠」、由来は急な登り坂を旅人が杖を突きながら登ったとか。峠の南にある「守屋山」は諏訪大社のご神体であり、神がはじめて杖を突いた場所という説もある。この句は三十数年前、中央高速道が山梨の大月止まりだった頃、春休みの子供を連れて伊那に帰ったときの景をたぐり寄せて詠んだものである。東京から甲府を抜け茅野に。そして諏訪大社脇から高遠に登る国道151号線に峠はある。眼前に八ヶ岳、霧ヶ峰、さらには北アルプスの峰々。眼下に、諏訪湖、諏訪盆地がパノラマのように広がり、信州三景観のひとつとなっている。ここから見た冬の名残ただよう蓼科の野焼きは、今も鮮烈に焼き付いている。

職の一線から離れた今年は、年の半分は田舎暮し。沢山の句材を拾い、大好きな故郷をいままで以上に詠んでいきたい。毎日を愉しみながら。

末筆になりましたが、彗星集、巻頭心よりうれしく御礼申し上げます。

星雲集
5月号巻頭
中村紘子

（なかむら　ひろこ）一九七三年長野県辰野町生まれ。奈良の地方紙記者を経て九七年読売新聞入社。中部支社（名古屋）経済部所属。執筆参加著書は『豊田市トヨタ町一番地』（文庫版『トヨタ伝』、新潮社）など。

秒針の音の中なる毛糸編み　　中村紘子

この度は誠にありがとうございます。ただただ驚き、素直に嬉しく思うと同時に、改めて伊那男主宰から叱咤激励をいただいたのだと身の引き締まる思いです。

信州の素朴な自然に囲まれて育ち、大学から駆け出し記者時代の五年半を、万葉の歴史息づく奈良の地で過ごしました。俳句を始めたのは、同郷で読売新聞の先輩記者だった萩原空木さんの勧めで、二〇〇八年に「春耕」に入会したことがきっかけです。

本業では時代を追い、時間に追われる毎日です。取材先へのいわゆる夜回り朝駆けが続き、気づけば投句締め切り前日や当日という事態（失態？）もしばしば。しかし、こんな中でも、眼と心を透明にして、時には苦し紛れに一句を捻りだそうとしている間は、自分自身を取り戻しているのかもしれないと少しずつ思えるようになってきました。句友の皆様との出会いを大切にし、俳句を通して今の自分を切り取ることができるよう励んでいきたいです。

第二回「銀漢賞」作品募集

「銀漢賞」について

昨年は創刊後半年であったが、銀漢賞を募集したところ、実に六七編の応募を得た。その熱意には選者一同身の引き締まる思いであった。今回は二回目。是非多くの方に挑戦していただきたい。二十句を作るのは相当な力仕事である。しかし苦悩しながら作句することによって、必ず何かを得ることができるものと確信している。作句は、過去、現在の自分を見詰め直すことに他ならない。良い機会である。奮励努力を期待している。

伊藤伊那男

応募資格
銀漢俳句会会員（同人・会員）による新作未発表の二十句

応募方法
B4版400字詰原稿用紙使用。右側の欄外に住所・氏名・電話番号を記入の上、銀漢発行所宛送付。
〒101-0051
千代田区神田神保町二―二〇　東明ビル2B

選考委員
伊藤伊那男・杉阪大和・武田禪次

締　切
平成二十四年十月一日（月）消印有効

入選発表
平成二十五年一月十九日（土）
銀漢俳句会年次総会（湯島天満宮）にて発表並びに授賞式